



命を守る放送局をめざす

鹿児島放送 代表取締役社長 | 後田 竜衛



2025年6月19日付で鹿児島放送（KKB）9代目の社長に就任しました。ちょうど「鹿児島市医報」に寄稿しないかと会社にお声かけいただいておりましたので、乱文乱筆ながら自己紹介を兼ねてお引き受けさせていただきます。

どくとるマンボウにあこがれて

私は鹿児島市の上町地区に生まれ、大龍小学校→坂元小（第3回卒業）、清水中学校→坂元中（第1回卒業）と、人口急増期に造成された玉里団地と坂元町の周辺で幼少期を過ごしました。1970年（昭和45）年、県立吉野公園ができたときの開園セレモニーで、なぜか「子ども代表」として金丸三郎知事にお礼の言葉を述べた記憶があります。

小学生のころは南洲神社の四方学舎で薩摩古武道「影之流」の稽古に参加して体を鍛え、夏休みは磯海水浴場か若宮プールでほぼ毎日、真っ黒になって泳いでいました。本を読むのも好きで、北杜夫「どくとるマンボウ

航海記」や手塚治虫「ブラック・ジャック」、山本周五郎「赤ひげ診療譚」といった、一風変わった医者が活躍する小説や漫画に夢中になりました。人の体に対する幅広い知識や技術、命を救おうとする使命感、壁にぶつかって諦めない強い信念。そうしたものに憧れました。とりわけ、歌人で医師だった斎藤茂吉の次男である北杜夫（本名・斎藤宗吉）氏が東北大学医学部を卒業後、船医として半年間過ごした体験をもとに書いた「マンボウ」シリーズは印象深く、いつか自分も船医となって世界を旅したいと思うようになりました。

鶴丸高校に入り理系クラスに進むと、同じクラスに農業研究者を目指すG君という同級生がいました。野菜を研究して世界の食糧事情を改善したいと熱く語る意気に感銘を受け、一緒に中古船を買ってアジアやアフリカをめぐり、農業と医療で人類に貢献しようと夢を語り合ったものでした。

船医あきらめ新聞記者へ

ところが私は医者ではなく「ブンヤ」の道に進むことになります。色覚に問題があり（赤緑色弱）、高校3年のとき詳しい検査を受けたところ、仮に医学部に進んでも国家試験の段階で難しいかもしれないと告げられました。その後、制度はだいぶ変わったようですが、当時としては諦めざるをえませんでした。

受験勉強に身が入らず、チャンネルをひねりながらテレビを見ていると、NHKの大学野球中継が目に留まりました。東京六大学野

球秋季リーグ戦の決勝、早稲田が慶應を倒して優勝した場面でした。満員の神宮球場は、学生たちの大歓声で揺れているようでした。

野球に勝ったぐらいで（といえば野球関係者に失礼ですが）こんなに盛り上がれるとは、よほど楽しい大学に違いない——。目標を失いかけていた私には、一筋の光明が見えたような気がしました。国立大重視の担任や親は渋い顔でしたが、せっかく東京に受験に行くのだから1校だけ私立も受けてよいと許しを得て、早稲田を受験しました。当時の第一文学部には心理学や社会学など、数理統計を使う専修があり、受験も英語・国語のほかは社会か数学の選択でよかったです。理系の端くれの意地を發揮し、数学で合格にこぎつけました。国立大は不合格でした。父は「わざと？」と苦笑いしていました。

志望する職業も船医から「もの書き」へと舵を切り、その修行のつもりで大学卒業後は朝日新聞社に記者として入社しました。事件や裁判、災害など社会部系の仕事に明け暮れ、3年前にKKBへ出向という形で40年ぶりに鹿児島に戻ってきました。

医師や歯科医師となった同級生も多い中、G君は、高校時代に宣言した通りに農業の研究者となっていました。人工衛星データも利用した畜産や放牧を研究する大学教授として成果を挙げていたのです。さっそく、記者やカメラマンと共に取材させてもらい、鹿児島の和牛日本一を紹介したニュースの中で紹介させてもらいました。現在は北海道へ研究拠点を移し、世界を飛び回っています。

KKBが県内3局目の民放テレビ局として開局したのは、ちょうど私が医師の道をあきらめて挫折を味わっていた1982年秋のことです。このたび、その社長を引き受けるにあたり、「命を守る報道、暮らしの役に立つ情報発信」に力を注ぐ、という誓いを立てました。

命を守る放送局をめざす

新聞記者となって以来、忘れる事のできないのは1993年7月12日夜、高さ30メートルを超える大津波が北海道奥尻島を襲い約200人が亡くなった北海道南西沖地震についてです。当時、私は3か所目の勤務地・函館支局に勤務していました。自民党の宮沢政権が倒れてのちに細川連立政権が誕生することになる衆議院選挙の真っ最中でしたが、ヘリで奥尻島に渡り、その年の12月初めまで4か月以上、函館と行き来しながら、「奥尻その夜」という37回の連載記事を先輩や同僚記者と5人のチームで執筆しました。地震発生から翌未明にNHK取材陣を乗せた民間ヘリが着陸するまで孤立状態だった6時間余りの間に島で何が起きたのかを再構成した記事です。

その中に、青苗岬の突端から3軒目に住んでいた家族の物語があります。イカ漁師の妻である29歳のお母さんは小学校1年生の男の子、3年生の女の子を連れて400メートル先の高台へ逃げる途中、祖母の様子を見に実家に立ち寄って津波に飲まれ、2人の子どもと共に命を落としました。実は祖母は先に避難していて無事でした。

連載の中で、たびたび津波に見舞われた三陸地方の「津波てんでんこ」という言葉を紹介しています。当時は、とにかく急いで避難せよという教えと受け取っていたようですが、現在では、互いに声を掛け合って避難を始めることで他の人たちの行動も促すこと、さらに、普段から高齢者や子供の避難の支援を含めてどう行動するかをあらかじめ話し合い共有しておくこと——も唱えた防災思想と考えられています。

しかし、奥尻から18年後の2011年3月11日の東日本大震災では、2万2,000人以上の命が失われました。宮城県の取材拠点の

デスクとして3週間過ごし、多くの方が津波から逃げ遅れた様子を記事として出稿しながら、奥尻の教訓が生かされなかったことに愕然としました。

とはいって、無力感に打ちひしがれている暇はありません。報道機関、とりわけテレビ局は、正確な情報でいち早く避難を呼びかける情報を放送・発出すること、そのための体制や設備をきちんと整えておくこと、災害が起きたときに「何が起きているか」を正確に伝えることで必要かつ十分な救援や医療、復興支援が迅速に提供されるよう促すこと、さらに、日ごろからどんな災害に備えどう行動するかの防災減災の知識を広めるという大切な役割を担っています。

奥尻の津波から3週間後には、鹿児島を豪雨が襲い甲突川が氾濫する「8・6水害」が起きています。大雨や土砂災害のほかにも異常な暑さや、桜島をはじめとする活火山の活動に対する備えなど、鹿児島の放送局が対応しなければならない対象は幅広く、エリアも南北600キロと広大です。

「オールドメディア」などと批判されることも多く厳しい経営環境ではありますが、地上波放送やインターネット、SNSなどを通じて、映像や音声でわかりやすく、きちんとした取材や確認作業に裏付けられた情報を届けることで地域を支えるという機能は、まだまだ輝きを失うことではないと信じています。

昨年、還暦を迎えたのを機会に新たなことに挑戦したいと思い、今年1月のいぶすき菜の花マラソンに初参加し、5時間43分かかりましたが完走しました。雨が降る中、沿道から「がんばれ」と手を振り、飲み物や食べ物を用意して応援してくださる地元の皆さまの温かさに、心から感動しました。

そして何よりもありがたかったのは、急に体調を崩された参加者を速やかに搬送し、適切な医療措置を施して救命して下さったことでした。医療スタッフや支援の皆さんに、こ



の場をお借りして心から御礼申し上げます。

40年ぶりに帰ってきた鹿児島はかけがえのない、大切なふるさとです。私は医者にはなれませんでしたが、放送局で働く者として、これからもミライを担う子供たちに価値ある多様な自然環境や社会をつないでいくために、できることはすべてやる。そんな覚悟で、私の使命と職責を果たしていきたいと思います。これからもKKBをどうぞよろしくお願ひいたします。

最後になりましたが、伝統ある鹿児島市医報に執筆の機会を下さった鹿児島市医師会のますますのご発展と、上ノ町仁会長さま、帆北修一編集委員長さま、関係の皆さまのご多幸、ご健勝を祈念し、筆を置かせていただきます。

2025年7月